

水戸藩士の墓

中台を歩く

来年、平成30(2018)

年は、明治元(1868)年から満150年の年に当たります。慶応4年9月8日から「明治」と改元し、この年の10月6日に水戸藩内部の戦いが八日市場周辺でありました。

幕末の水戸藩内では、おおまかに言って、保守派の「諸生派」と改革派と言われる「天狗派」との間で抗争が繰り返されました。

慶応4年1月に起こった鳥羽・伏見の戦い(場所は現在の京都府)が、4月には江戸

城が新政府側の支配下に入るなどし、旧幕府側との戦いが関東にも及びました。さらに北陸、東北、北海道にまで広がった戊辰戦争は、翌年の明治2年5月に終結しました。

旧幕府軍と共に各地で戦った水戸藩諸生派の市川勢は、八日市場まで逃れて来て、追いかける天狗派と戦い、ここで終えることとなりました。

最近までの調査で、八日市場までたどり着いたのはおよそ100人で、30人ほどが中台周辺で戦死し、10数人が野

手周辺に葬られ、残る50人余りが各地に散ったとされています。

中台村周辺での戦死者25人を埋葬したのが

「脱走塚」で、この戦いを「松山

脱走塚を示す標柱



戦争」と呼んできました。

大正10(1921)年刊行の『匠瑳郡誌』に記載された松山戦争という呼び名は、近年、「八日市場・中台の戦い」に変わりがつあります。

明治22(1889)年5月に「水藩(水戸藩)脱走隊の法会」と新聞で報じられていることから、この頃すでに脱走塚の名称はこの地域で定着していたことがうかがえます。

諸生派市川勢の子孫は、「仰天会」を組織し、これを発展させて平成18(2006)年に「水戸藩国事殉難者恩光碑保存会」が結成され、2年後の20年には中台地区で「140年慰霊法要」が行われました。その頃から保存会から脱走塚の名称について、「時代に合った名を考えてほしい」との意見が出るようになります。

こうしたことを受けて、11月に開かれた市文化財審議会で、脱走塚を理解しやすくするため、「(水戸藩士の墓)」と追加記載することが決まりました。

(市文化財審議会委員・

依知川雅一)

関秘書課広報広聴班

☎73・0080